
ETERNAL CHAOS～雑貨商人の挑戦～

日下祈京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETERNAL CHAOS（雑貨商人の挑戦）

【Nコード】

N0356B

【作者名】

日下祈京

【あらすじ】

高レベル者だけが立ち寄れる狩場、ジーナスラボトリー。それ程遠くない過去、その入場許可を得たエイディア、キリイは何時もの様に雑貨商人から回復アイテムを買おうとした。すると…

ガギィ……ン

甲高い金属音が洞窟内に鳴り響く。

続いて2度、3度。

立て続けに振り下ろされる10本の巨大な剣を、素早い身のこなしとさほど大きくないリングだけでかわしている。

そんな1人のエイディアに対峙するのは、5匹のウィンターナイト。だがそれだけではなかった。

周りには、さらに6匹のウィンターナイトが倒れている。

それらはもはや立つ力さえも残っていないようで、呻き声だけを上げている。

残っている5匹のウィンターナイトも傷ついてはいるものの、まだまだ体力には余裕があるようだ。

エイディアの方は、肩で息をしてはいるものの、傷は殆ど負ってはいなかった。

そしてそれらを円状に囲むように、20程度のさまざまな種族の者がその闘いに見入っていた。

事の発端は一時間ほど前。

「賭け？」

様々な種族の者が行き交う中、一人のエイディアの少女が首をかしげていた。

その少女、キリィはレベルこそそんなに高くは無いのだが、戦闘技術においては少々名が売れていた。

「そう、賭けだよ。非常に単純な、ね。」

そう言って笑っているのは、ジーナスラボラトリー中央広場の商店

の雑貨商人。

キリィは一ヶ月ほど前からこのダンジョンに良く来るようになっていた。

そして何時しか、商店の人々と仲良くなっていた。

そしていつもどおり、挨拶を交わしてアイテム補給を済ませ、狩りに出ようとしたときに雑貨商人に呼びとめられたのだった。

「コレが何かわかるかい？」

そういつて雑貨商人が大きなかばんから取り出したのは、一つの装置と、一ダースのカプセル。

その装置は帰還装置ほどの大きさで、それほど重くは無い。

ON・OFFと書かれたスイッチが一つと、小さな液晶画面、そして伸縮可能なアンテナが一つついているだけだった。

「しらなーい…、初めて見た…。な、なあにこれ？」

「それはね…」

商人が説明をしようとしたとき。

「あ、キリたん、こんろ。」

そう声をかけてきたのは一人のブルカン。

「お、ロキとんじやないのー、こんちゃー。」

「なにえろいことして…、それってまさか…っ！」

「おや、誰かと思えばロキーヌ君じゃないか。君もどうかね？」

そう言う商人はにっと笑った。

「あ、あはははは。こんにちはー…、ま、またの機会にね？」

「？」

慌てふためくロキーヌとニコニコと笑みを浮かべている商人を交互に見るキリィ。

状況がさっぱりわからない。

不意にロキーヌがひそひそと耳打ちをしてきた。

「ちょ、ちよっとキリたん！悪いこといわないからコレだけはやめなっ！」

「な、なんなのよ…。」

「おいらも酷い目にあつたんだから：思い出すだけでも：。」

「だ、だからなんなのよ。ロキとんが弱いだけじゃないの？」

「ひどっ！」

「その機械の方はね、半径6m以内にいる敵のターゲットを、強制的に自分だと認識させる装置なんだよ。上ところにアンテナがついてるだろう？それを伸ばしてスイッチをいれると、アンテナから特殊な電波がでて、モンスターのターゲットを強制的に自分に向けさせる、そんな道具なんだよ。」

説明をしたのは商人だった。

「へえ：初めて見た：。」

「そりゃそうだよ、ここにしか無いモンだし、「賭け」が終わったら返却しなきゃいけないしね。」

ロキーンが付け足す。

「それで、こっちのカプセルが、ウィンターナイトの魂が詰まってるカプセルだ。」

「へえ：。は？」

商人の意外な言葉に、キリィはワテンポ遅れて吃驚した。

ウィンターナイトといえば、ホワイトホーンのボスの存在。

2本の巨大な剣を軽々と振り回し、その攻撃を受けて平気でいられる者は少ないだろう。

ここ、ジーナスラボラトリーでも数多く見られる、強力な物であった。

「で、賭けって言うのは簡単なことだよ。この12個のカプセルの中に詰まってるウィンターナイトを全部倒せば良い。制限時間も何もないけど、一人で戦うって言うのと、連続でも一気にでも良いけど休憩無しで全部倒すのが条件だね。」

「き、きつくない：？」

キリィはすこし引きつった顔で返事をする。

「そりゃきついさ。だけど、もしも出来ればこれをあげるよ。」

そう言って商人が見せたのは一枚のカード。

金色に輝くそのカードもまた、キリィは初めて見る物であった。

「コレはね、どこの商人で売ってる物でも、全品半額になるって言うカード。」

「ホ、ホントに!？」

「ああほんとさ。」

「嘘ついたら叩くよ？」

「ホントだってば、信用してくれよ。」

「うーん……。」

キリィはどうしようか悩んだ。

正直、商人の販売物全品半額は美味すぎる。

高レベルの召喚石を多用するこのダンジョンでは、特に重宝するだろう。

しかし。

ふとロキィヌを見ると心配そうな顔でキリィを見ている。

恐らくロキィヌもコレに惹かれて挑戦したんだろう。

しかしこの様子を見ると、失敗したようだ。

ロキィヌとは出会って長いというわけでもないが、かなり力を持っているブルカンであることは解っていた。

そのロキィヌが失敗したとなれば、キリィもタダではすまないだろう。

少しの間考えた末、出した答えは。

「やります。」

キリィはそう言うのと商人を見据えた。

「無茶はするなよ。それと、一個色の違うカプセルがあるだろ。それだけは特別だからな。」

そう言って笑い、疑問を残した顔のキリィに、商人は装置とカプセルの入ったケースを渡した。

商人が回りで話をしていた人々に事情を話している間に、キリィは装置を腰のベルトにつけていた。

其処へ。

「ホントにやるの？」

話し掛けてきたのはロキータだった。

「うん。全品半額だよ？それにさ…」

「それに…？」

「こー、腕試しもできるし、なんか絶対無理っぽいじゃん？それを気合とかでどうにかしたらカッコ良くない？」

そう言ってキリィはロキータに笑いかけた。

ロキータは哑然としてしまった。

死んでしまうかもしれない闘いに、そんな簡単に挑んでしまう彼女を見て。

だがしかし、同時に彼女がそんな性格であることを思いだし、ふと笑いがこぼれた。

「成功したら、なんかおごってよ。」

「POT一個くらいならね。」

「ひどっ！キリタんのケチいー！」

「あはは、自分でやりなさいよ。もう一回やれば、ロキとんならできるよ。」

そう言ってキリィは、人で作られた円形の闘いの場に走っていった。

闘いは苛烈な物であった。

なんと、無謀にも彼女は装置の電源を入れたと同時に、12個のカプセルを同時に使用したのだった。

しかし、一つだけ、色の違うカプセルだけは発動せず、現れたのは11体の巨体、そして22本の刃。

それと彼女を見比べ、其処にいるすべての者が息を呑んだ。

どうみても、勝ち目は無い。

容赦無く襲い掛かるウィンターナイトたち。

第一撃目で、誰もが終わりだと思った。

しかし。

ザガッ！

幾本もの巨大な剣が向かったところにキリイの姿は無く、ただ舞い上がった雪だけがあった。

慌てふためくウィンターナイト達の一匹の後ろにキリイは居た。

彼女はリングを振り、ウィンターナイトにダメージを与えた。

が、彼女の背後にはまた別のウィンターナイトが既に剣を構え、横薙ぎに剣を振り、彼女を攻撃した。

だがその攻撃も空を切り、勢いあまって別のウィンターナイトの腕に傷を負わせた。

彼女は身を屈めて攻撃を避け、飛びのきながら先ほど攻撃を与えたウィンターナイトにもう1撃浴びせる。

通常、エイディアの戦法は召喚獣を盾にし、その後ろからエイディアが攻撃するという物である。

しかし、彼女の戦法は明らかにそれとは異なっていた。

ウィンターナイトが縦に、横に、また何匹も同時に、絶え間無くキリイに攻撃を与える。

そのたびにキリイは身を屈め、高く飛び、股下をくぐり、また剣や敵自身を踏み台にしたりして確実に攻撃を避けて一撃ずつ攻撃を当てている。

どれかといえば、接近戦が得意なブルカンや、双剣を使うハイブリダーの戦法であろう。

彼女がこの場でエイディアの常套な戦法を用いないのは、彼女なりの信念が有った。

「召喚獣は死なせない」

ただ単に勿体無いというのも有るが、いくら召喚獣とは言え、何かを捨て駒にするのは嫌いなのであった。

彼女、キリイの闘いは、まるで何かの舞のようであった。

そして今に至る。

「すげエ…。」

気が付けば既に半分のウィンターナイトを倒している。

誰もが一匹も倒せずに、秒殺されて終了と予想していただけに、みなが呆気にとられていた。

「だ、誰だよあいつ、知ってる?」

「知らないの?」

「有名なのか?」

「其処までじゃないけど、知ってる人はそこそ居るわよ。」

「レベルが高いのか?」

「ちがうさね。レベルはまだフルメタに成り立ってってトコじゃないかな。」

「じゃあ、ギルドマスターとかですか?」

「いんや、たしかマルコムさんとこのサブじゃないっけ。」

「じゃあ何がそんなに有名なのさ。」

「いやー、何がつてわけじゃないけど、とにかく強いよね。武器とかじゃなくて、身のこなしとかが、ね。」

それを聞き、目の前の戦いを見て、誰もが納得した。

「グガアッ!!…ッグア…アアッ。」

ウィンターナイトの手から巨剣が滑り落ち、次いでその巨体が崩れ落ちた。

「あと…4ツ!」

そう言いながら、背後から振り下ろされる一撃を振り向きざまにリングでいなし、自分も横に飛ぶ。

剣は地面の雪に減り込むが、すぐにその剣は大量の雪を巻き上げながら引き抜かれ、すぐさまキリイに向かって振られていた。

着地したと同時にそのことを感じたキリイは、すぐさまシャドウを召喚する。

シャドウ召喚がその攻撃を受けとめた刹那、シャドウが金色に輝き、衝撃波がウィンターナイト達を襲った。

スキル、サモンフィッシュを発動させ、敵がひるんだ隙に、剣を

振るってきたウィンターナイトに攻撃を食らわせ、同時にシャドウ召喚を引っ込める。

実に鮮やかな攻撃だった。

それからまた幾度巨剣が振られ、そして空を切ったか。

ウィンターナイトはまた1体倒され、残りは3体となった。

立つ力すら奪われ、ゆっくりと前のめりに崩れ落ちるウィンターナイトの背中を素早く駆け上がり、目の前のウィンターナイトを飛び越えると同時にリングを振り攻撃を浴びせる。

その奥に居たウィンターナイトが、空中のキリイめがけて剣を振るったが、既に其処にキリイの姿は無かった。

レポートでそのウィンターナイトの背後に移動していたのである。確実に攻撃が当たったと思ったのに、手応えが無かったのでワケが解らなくなっているウィンターナイトに一発攻撃すると、すぐさま右側に飛びのいた。

その直後にはその位置に2本の剣が振り下ろされた。

「…ッ」

雪を舞い上がらせて着地したキリイの顔が少しゆがむ。

彼女の左足の脹脛に、一本の傷。

（避けそこなっちゃったか…そろそろキツいかな…。）

それもそのはず、彼女はかれこれ30分以上戦いつづけている。

しかもその間彼女は殆ど召喚を使わずに、すべての攻撃を避けつづけてきたのだった。

疲労がたまって反応が遅れてしまうのも、無理はない。

だがしかし。

「…フッ」

息を吐き、その場からすぐさま移動し、攻撃を繰り出す。

考えている暇も、休んでいる暇も無い。

敵はそんな暇は与えてくれない。

ひたすら敵の攻撃を避け、確実に攻撃を当てる。

残りは3体と、力の解らない、「特別」なカプセルの中の一匹。

「おい…、そろそろ限界なんじゃねーの？」

誰かがそう言った。

かすり傷とは言え、段々とキリイの体に傷がついていく。
着ている服も、裾が少しずつ破れていつている。

「確かに…今何分くらい経ってる？」

見物人の一人である、レベル280近い女ヒューマンが雑貨商人に尋ねた。

「そうだな…40分を少し超えたってトコか。」

雑貨商人は手に持った時計を見ていった。

「アンタがやったときはもうそろそろ終わってた時間か？」

「一匹ずつ、順番にやってね。」

雑貨商人の問いに、女ヒューマンが答えた。

そして息をふうつと吐きだし、付け加えた。

「纏めて相手してたら、ここまで倒せたかどうかもわかんないわよ。
まったく…。」

ため息をもう一つついた瞬間、周りの観客から、疎らではあるが感嘆の声が漏れた。

女ヒューマンがキリイの戦いに目を向けたと同時に、ウィンターナイトがまた一体倒された。

残るは2体。

「……ホント、すごいわね。」

女ヒューマンは地面に杖のようにして立てていた銃を、肩に乗せた。

（あと2体か…。）

9体目のウィンターナイトを倒し終わったキリイは、其処で戦法を変えろ。

前述の、従来のエイディアと同じような戦法だ。

体力的にもそろそろキツくなってきた上に、最後の1ツ、まだ未使用のまま地面に転がっているカプセルの能力は未知数である。

その為にも体力の温存は、適切な判断であった。
だがしかし、今回それは通用しなかった。

シャドウ召喚をまったく無視し、2匹のウィンターナイトはキリィに向かってまっすぐに突き進んできたのである。

「なっ…ッ!？」

予想外の出来事に、キリィはとっさの判断が遅れた。

横薙ぎに降られた剣の軌跡には微量ながら赤色が混じり、キリィの体は3mほど吹っ飛ばされた。

「あぐっ…!」

地面に叩き付けられ、悲痛な声を漏らしたものの、すぐさま態勢を立て直す。

彼女の前髪の量は減っており、額の右目側には横にまっすぐに傷がついていた。

傷はそれほど深くは無いが、出血が激しい。

彼女は目に流れ落ちてくる血を拭い、すぐさまヒーリングを施す。

出血は止まったが、痛みはまだ取れない。

動こうとしたときに、傷が痛んで顔を少しゆがめたものの、頭上から振り下ろされた巨剣の一撃は難なく回避した。

（なんで召喚を無視したのかしら…。っ、あーもー!面倒なんだから!）

考えていれば攻撃への反応は遅れてしまう。

咄嗟にそれを判断したキリィは考えることをやめ、目の前の敵を倒すことに集中した。

その様子を見ていた、先ほどの女ヒューマンは、キリィが考えたことと同じことを考えていた。

（どうして召喚獣を無視してあの子へ…?）

デカレン2Fに居るゴンマーは、時々召喚獣から逃げるような行為をし、別の者が近くにいるとその者を攻撃するということが何あるが、それとは違いキリィに一直線に向かっていつていた。

なぜか。

（あの子だけを狙う理由……っ、そうか。）

その理由に気づいた女ヒューマンを見て雑貨商人はニヤリと笑った。

「わかったかい、嬢ちゃん。」

「ええ…、ちよつと考えれば当然のことじゃない。」

「はっはっは、まあ、そうだな。」

商人は腕を組んだまま笑い声を上げた。

「な、なんでなの？」

其処に割って入ったのは、キリィが攻撃を受けたときから急に心配そうな表情に変わった、ロキーンだった。

「わかんないの？」

「わからないのか？」

「ぐ…、ええ…？」

商人と女ヒューマンに、同時にそう言われて再び考え出すロキーン。その様子を見ているとなかなか面白く、手を顎の下に当てたり、頭ではなく兜を撫でたり、鎧の留め金をバッチンバッチンと外したりつけたりしていた。

そして不意に。

「あ、あぁー、そっかそっか。あの機械じゃん？」

「そう、あの機械のスイッチが入っている限り、ターゲットは彼女にしか行かない。それだけさ。」

「なるほどねえ…、じゃあエイディア大変じゃない？」

「まあ、一番大変だろうな。」

商人と女ヒューマン、そしてロキーンは顔を見合わせ、再び目の前の戦いに集中した。

（機械…？そっか、コレか！）

戦いながらロキーンの声を目にしたキリィは、自分の腰のベルトについている小型の機械を思い出した。

（厄介だなぁ…でもスイッチ切れないし…、しょうがないっか。）

召喚獣を盾にする戦法は諦め、今までどおりの軽快なフットワークを活かした戦法を続ける。

そして。

「サモンフィッシュン！」

その掛け声とともに、攻撃をキリイの目の前で受けとけたシャドウ召喚が金色に光り、衝撃波が2匹のウィンターナイトを襲う。

「グガァッ！」

「アガッ！」

同時に悲鳴を上げ、2匹のウィンターナイトが同時に膝を折り、地面に臥した。

しばらくの静寂。

聞こえるのはキリイの荒い呼吸と、ウィンターナイト達のかすかな呼吸音。

そして、歓声が起こった。

「すげえー！」（♂ハイブリ）

「よくやったぞーっ！」（♂ヒュ）

「おつかれっ！」（♂エイ）

「結婚してー！」（ロキ）

「今度一緒に狩りましょー！」（♀ブル）

キリイは肩で息をしながらも笑いながら、一名だけには中指を突き立てたものの彼らに手を振って返事をした。

その時。

残された最後の一個のカプセルが青白い光を放った。

「さあ、コイツがメインディッシュ。」

周りの物が静まる中、雑貨商人が不適な笑みを浮かべ呟いた。

「ウィンターナイトロードだ…。」

其処から出てきたのはタダのウィンターナイトではない。

身長は元のウィンターナイトの2倍ほど、巨剣もタダの巨剣ではなく、禍禍しい形である上に青紫の淡い光を放っている。

また、鎧も元のウィンターナイトよりもゴツく、丈夫そうに見られ

た。

「キリィ…、頑張つてね。」

女ヒューマンがそう言うとはほぼ同時に、ウィンターナイトロードはキリィへの攻撃を開始した。

戦いは皆が予想していた以上に激しいものであり、キリィの劣勢は目に見えていた。

ウィンターナイトロードは、その巨大で鈍重そうな体や重々しい鎧とは裏腹に、ウィンターナイトを上回るスピードを備え持っていた。相手は1体、体が大きい故に攻撃も当てやすく、攻撃も大振りで軌道は読みやすい。

だが、キリィは先の戦いで疲労しており、ウィンターナイトロードの激しい攻撃を避けるのに精一杯であった。

（ウィンターナイト3匹同時相手のほうがまだ楽だよ…ッ）

そんなことを考えながら右に左に、上に下に体を動かしウィンターナイトロードの攻撃をかわす。

剣は2本だけなので軌道を読むのは確かに簡単ではあるが、剣を振るスピードが速く、またリーチも伸びているので避け難さではウィンターナイトなどの比ではない。

後方にジャンプで横薙ぎの剣をかわす。

剣の切っ先が雪面に掠っただけなのに、辺りの雪が大きく舞い上がり、雪が10cmほどえぐられていた。

こんな攻撃を受けるところか、いなそうとしただけでも危険であろう。

つまり、キリィはこれから先完全にウィンターナイトロードの攻撃を避けなければならなくなった。

既に戦闘時間は50分を越えている。

その間殆ど動きっぱなしであり、体力にそこその自信があるキリィでもきつくなってきた。

横薙ぎに振られた剣を屈んでかわし、真上から振り下ろされた剣を

跳んで避けようとした、その時であった。

「ッ！」

足元の感覚が一瞬無くなる。

地面を蹴って横に飛ぶはずが、蹴りだそうとした足が滑ってしまった。

（ヤバっ！）

そう思うと同時に、ほぼ反射的にキリィは防御策をとった。

シャドウを召喚しながらとっさにテレポートをする。

巨大な剣はシャドウ召喚を真つ二つに切り裂き、大量の雪を巻き上げながら地面にめり込んだ。

その場所にキリィの姿はない。

キリィは敵の背後にテレポートしていた。

額から右頬にかけて縦一線の傷が付いて、そこから血が流れ出ている。

「お返しッ！」

右手に持ったリングを振ると同時に、左手に召喚石をもち、シャドウを召喚。

そして直後にサモンフィッシュを発動する。

「グオアッ！」

ウィンターナイトロードの体が一瞬よろける。

ここぞとばかりにキリィは攻めの姿勢に入った。

ウィンターナイトロードのふら付いた足元にテレポートすると、姿勢を低くして思いつき足を払う。

かなりの巨躯であるウィンターナイトロードであったが、ふらついていた足元を掬われて、簡単に体勢が崩れる。

下敷きにならないよう、キリィは足払い直後にテレポートをした。

出現位置は、倒れ掛かっているウィンターナイトロードの顔の間近。

「ちよいやっ！」

などという、本気なのか巫山戯てるのかわからない掛け声を上げながら、ウィンターナイトロードの顔面に蹴りを入れる。

「ガッ！」

崩れかけた姿勢に蹴りが加わり、ウィンターナイトロードはいとも簡単に地面に背中を預けてしまった。

重い振動が辺りに響き渡ると同時に雪が舞い上がり、周囲は何も見えなくなった。

「と・ど・め！」

蹴りをキメた位置から急降下し、キリィはさらに蹴りを地面に倒れているウィンターナイトロードの喉元目掛けて叩き込んだ。

「ガ……ッ！」

声にならない声が聞こえた。

雪のスモークが晴れたとき、口から血を吐いて痙攣しているウィンターナイトロードの横に、キリィが腰をぺたんと地面に降ろし、肩で息をしていた。

辺りは静まっていた。

「や、やった……の……？」

ロキィヌが呟く。

それに気付いたのか、それとも何となく目が合ったのか、キリィはロキィヌに向かって満面の笑みでVサインをした。その瞬間、歓声が巻き起こった。

「やりやがった！」（ヒューマン♂）

「マジかよ！」（ブルカン♂）

「信じられない……！」（エイディア♀）

「今夜は寝かさないよ！」（ロキ）

「すげえー！なあ、今から狩り一緒にしようぜ！」（ハイブリ♂）

「あたしとスールの契りを交わさない？」（ブルカン♀）

「ねえねえ！今度ウチのギルドでエヴォやらない！？」（カイリ♀）
皆が一斉に、キリィの元によってきた。

約一名に使いきりそうな召喚石を150km/hで投げつけた他は、キリィは困ったような嬉しいような顔で対応していた。

そこに、雑貨商人が近寄ってきた。

「あ、おっちゃん。」

その顔を見ると、キリィは立ち上がろうとしたが、疲れの所為かよろけてしまった。

そこを、雑貨商人の隣でずっと観戦をしていた女ヒューマンが手を取って支えた。

「大丈夫？」

「あ、ありがと。」

につこりと笑って体勢を立て直すと、女ヒューマンも微笑みを返した。

「約束だったな、ほら。」

そういつて雑貨商人は、胸元辺りから金色のカードを取り出して、キリィに渡した。

「其れは君にしか使えないからね。あ、落としても再発行は出来ないから、気をつけるんだよ。」

「えへへ、ありがと！」

そういうとキリィはカードを受け取った。

「いいなあー…。」

ロキーヌがキリィの後ろからカードを覗き込む。

「ロキーヌもやったら？」

「うーん…。」

「はっはっは、いつでもいいぞ。」

雑貨商人が笑うと、キリィもつられて笑った。

ロキーヌはちよつと困ったような顔をしていた。

「じゃあ、おつかれさん。ロキーヌ君、いつでも待ってるよ。」

そういうと雑貨商人は踵を返して自分の持ち場に戻っていった。

ただただ乾いた笑いをするロキーヌにキリィは不意に話しかけた。

「ロッキー。」

「え、あ、何？急に変な呼び方して。」

「疲れちゃった。」

「へ？」

「おんぶ。」

「は？」

「おっぱいあたるーとか、変なこと考えたら蹴り上げるからね。」

「ちょ、ひどい！」

その直後。

辺りがざわつく。

周りの視線がロキーヌに注がれる。

殺気。

「ちょ、ちょっとまって！おいらそんなこと考え…いや、ちょっとは考えてるけど、おいらがおんぶするよとか言ったわけじゃなくってキリたんがしてって言って来たんだし、おいらに何にも罪はない！罪はないよ！アドントハヴギルティ！オーケイ！？だからその物騒な斧やら銃やらリングやらを収めようぜベイベ！穩便に話し合おうじゃないか！って言うかキリタンも何か言て…あ、あれ、なんで既に背中に乗ろうとしてるの！その行為は皆を煽るだけ！オーケーオーケー！平和的に行こうじゃないk」

(後書き)

如何でしたでしょうか。

まだまだ稚拙な文章で御座いますが、楽しんでいただけたならば幸いです。

次回はいつになるかわかりませんが…。

よろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356b/>

ETERNAL CHAOS～雑貨商人の挑戦～

2010年10月9日04時30分発行